

---

# パパアクエスト

馬路キレ子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ババアクエスト

### 【Zコード】

Z2610E

### 【作者名】

馬路キレ子

### 【あらすじ】

しみつたれで、がめついババアが駄菓子屋を止めてコンビニ経営をしだした。あ、それで、全然関係ねえけど、いわゆるRPG的なファンタジーワールドに飛ばされたんだわ。

## プロローグ

金に意地汚いしみつたれの駄菓子屋のババアが開いたコンビニは、今日も盛況だつた。

「にひひつ、まいど！お釣り450万円！」

年甲斐も無くレジスターを軽快に打ちながら、客が渡した千円札を抜き取るババア。

このババアの名前は米。<sup>ミタケ</sup> 年季の入つた92歳、娘3人に孫6人にひ孫が9人。

付近では有名な強欲ババアで、まだ歯の揃わないような幼稚園生からチヨコレートは巻き上げるわ、7、80歳がザラに居る老人会の旅行費は奪うわ、とにかく金にガメつい。

ケチでガメつい割りに人に好かれる特異なババアだ。通称『強欲鉄人ババアゾーン』

だが、そんなババアも今月、ついに旅立つちまた。え？どこに旅立つたかつて？

そりやあんた。剣と魔法と中世で有名なファンタジーな異世界だよ。

## プロローグ（後書き）

主要登場人物のカテゴリにババアってねえのかよ！

## 魔法使いに転職するババア

1

「にひひつ、あたしはねえ、勇者つてのになりてえんだが」

ババアは、異世界の転職所に來てた。

いわゆる剣と魔法の世界にババアが迷い込んだつていうお決まりの話だが、ババアは案外、異世界のことをバババババツと納得しちまつたみてえで、村の外にいるモンスターを倒すと金が手に入ると村人Aのジジイに聞いて、バババババツと転職所まで來ているってわけ。

なんでババアが勇者に転職したいかつて？

そりやおめえ、ババアの職業が先頭に向かない商人だつたからだよ。

「ヨネ様が勇者になるには修行が足りません。当ハローワークファンタジー世界出張店では、まずは戦士をオススメしますよ」  
「戦士い？あたしゃ重いもの持つのは嫌だし、汗臭いのは嫌だよ」「では魔法使いなど如何ですか？強力な魔法で敵を倒せば、お金も効率良く手に入りますし」

「にひひつ、つてことは魔法使いつてのは儲かるのかい？」

「ええ、魔法使いは人気職業ですから。お仲間のお誘いも引く手あまだと思いますよ」

「にひひつ、よし決めた！じゃあ今から魔法使いつてやつにならうじやないか」

ババアは魔法使いに転職した。

ヨネ レベル1

職業	商人	魔法使い
HP	: 19	9
MP	: 0	14

「にひひつ、じゃあ早速暴れるとするかね！」

「あ、あのお仲間のほうは」

「仲間あ？あたしの取り分が減るじゃないかーそんなのは要らない

よー」

「あ、お婆さん…ちよ、ちよっとちよっと…」

ババアは、とりあえず転職所を出ると武器と防具を…  
あのケチんぼが、そろえるはずがねえだろ。

装備：ぬののふく（初期装備）

## スライム軍団と戦うババア

2

\* スライム が 2匹 あらわれた！

ババアの初戦闘。

青色発光ダイオード並の光を放つブヨブヨモンスター・スライムちゃんは、ニヤニヤババアを見る。

ババアは、「ゴールドのためだ！」と言いながら、とにかく我武者羅にぶん殴つた。

もうお迎えも近い年頃だつてのに、どこにそんな体力があるのかわからんぐらにぶん殴つた。

でもババアの力は1。スライムの防御力は2。ステータスを覗く限り、ババアが勝てる見込みはない。

「毎日食べたらお腹すつきりの蒟蒻ゼリーみたいにブヨブヨしていくがー！あたしの攻撃が、ぜんぜん利かないじゃないか！」

「ピギヤー（スライムの鳴き声）」

拳が利かないなら魔法を使えばいい？  
甘い甘い。このババアはケチなんだぜ。

MPを消費する魔法なんて、使うわけがない。

\* ヨネ は 戦闘に勝利した！

経験地2 獲得 5ゴールド 獲得

「ふう。しょうじょうHPを減らしちまつたようだね」

ヨネ レベル1

職業：魔法使い

H P : 1

M P : 14

少々なんでもんじゃない。むしろババアの口から血反吐が出てるぞ。  
そのH Pは今すぐ宿屋か薬草で回復しないと危険なレベルだ。  
ババアは悩みぬいた末、一度村の宿屋に戻ろうとした。  
だが…

\* スライム（当社比三倍）が一匹あらわれた！

ひえええええ。スライム（当社比三倍）だあ！

こいつは普通のスライムの3倍でかくて、3倍色が濃くて、3倍ジ  
ヤンプ力がある、スライムと比べると27倍強いといふ、こじら  
ー帯を仕切るボスみたいな奴だ。

「ポギヤー（スライム当社比三倍の鳴き声）」

「にひひっ、こいつはでかくてゴールドもたんまりもつてそうだよ  
！」

ババアは無謀にもスライム（当社比三倍）に襲い掛かつた！  
もちろん素手で。

「ポギヤー」

あーあ。死んだなこりや。

ファンタジー世界に死なんて概念持ち込んでいいのかどうかわから  
ねえけど、とりあえず重症と氣絶つて感じか？ババアはたぶん知ら  
ないけど、村に戻ればゴーラドが半分になっちゃうペナルティつき

なんだぜ。死亡ってのは。

「ひひひー！」

- \* ヨネ の カいしんのいちげき！
- \* スライム（当社比三倍）に27のダメージ！
- \* スライム（当社比三倍）を倒した！

あつ！こいつかいしんのいちげき出しあがつた！

スライム（当社比三倍）は、かいしんのいちげき喰らわない確立も3倍で、素早さも防御力も3倍だが、敵から受けるかいしんのいちげきのダメージは27倍なんだ！

う、うわあ、こりゃとんでもねえことになりやがつた！

- \* ヨネ は 戦闘に勝利した！
- 経験地54 獲得 145ゴールド 獲得！

ピロッローリロッロー

やばいーーーの音はまさか！

- \* ヨネ の レベルは 3にあがつた！
  - \* HPが14上がった。MPが20上がった。力が2上がった。
  - \* 防御が3上がった。素早さが2上がった。魔力が40上がった。
- でたよー！運良くボスを倒しちゃって、ぶつ飛んだレベルアップしちゃうの！
- こりゃもつ、付近のスライム軍団には手がつけられないほどレベルアップじゃん！
- ババア強すぎるよババア！

ヨネ レベル3

職業：魔法使い

H P : 1

2 3

M P : 1 4

3 4

「おや。レベルアップするとＨＰとＭＰが全快するっていう形式かい。こりゃいい！スライムを狩りまくって、『ゴールド』を溜めるよお！ひやつひやつー」

ババアはその後、一人で一百匹くらいのスライムを狩った。  
どうせ宿屋に泊まるからと言つて、最後には回復魔法をガンガンつかつてた。

効率に目覚めたババアに、付近のモンスター達が適うはずもなく、  
ババアはがんがんレベルと金を溜めた！

ヨネ レベル4

職業：魔法使い

H P : 3 2 6

M P : 0 4 8

装備：ぬののふく

所持金：850ゴールド

「ひひひひ…たんまり溜まつたねえ。まずはこの『ゴールド』を銀行に入れて…」

街に帰るババアの背中は、なんか誇らしげだったけど、田はやはたら欲望に満ちていたぜ。

なんとなく考へることわかるけど、気をつけろババアー！

この世界の銀行は金利〇で、手数料は預けた金額の10%だぞー！

『氣をつけろー！

## 魔王退治を頼まれるババア

3

ヨネ	レベル10
職業	魔法使い
HP	: 26
MP	: 48
装備	ぬののふく
所持金	: 4274「ゴールド

スライム狩りを繰り返して経験を重ねレベルを上げ続けたババアは、辺りでは泣く子も黙ると言われるぐらい、とんでもない有名人になっていた。そんなとき、その辺一帯の国を治める王様にババアは召しだされた。

「魔法使いヨネよ。お前の噂は聞いてあるぞ。是非遙か西の島に住む魔王を倒して欲しい」

「にひひひつ、王様あ、まさかタダってわけじやないんでしょうね」「わかつておる。それ相当の褒美と、魔王に攫われたイケメンの王子を与えよう」

「にひひひつ、金と権力と男。そいつはいいね。にひひつ」

「ああ、それといい忘れたが、他にも魔王退治に出発した者たちがいるから、賞品は早い者順じゃ。くれぐれも先を越されないようにな」

「にひひつ、わかつてるよ王様あ！」

邪悪なババアの笑いにすげー幻滅する王様だったが、それはそれ。まあどうせこんな奴が魔王倒せる可能性なんてミジンコクラスだろ

「うど、期待せずに待つことにした。」

一方ババアはといつと…

「おい！あんちゃん！転職だよ！転職！一通り魔法も覚えたしね！  
攻守完璧な戦士に転職だ！」

「は、はあ…またあなたですか」

転職所で職業を替え

「おい！おめえさんの家で一番攻撃力の高い武器と防御力の高い防  
具をよこしな！」

「は、はい…」

武器防具屋で武器防具を揃え

「薬草買占めだ！！ええいまどろっこじい購入台詞なんてどっかに  
置いておゆき！いいから、あるだけよこすんだよ！…！」

「は、はいまいど」

道具屋で薬草を買い占めていた…。

ヨネ レベル10

職業・戦士

HP : 70

131

MP : 103

42

装備・はがねのつるぎ

：はがねのよろい

：はがねのかぶと

所持品・やくそう × 78

所持金・6「ゴールド

「ひひひっーイケメンとゴールドは誰にも渡しゃしないよー。」

ババアは意気揚々と街を出ると、橋を渡つて一路魔王の城を目指していった。

それにもしても、攻撃力と防御力を重視のガチ装備に、宿屋いらずの薬草の数…

どう考へても、ババア本気すぎるだろ…

## 冒険しながら人家を物色するババア

4

戦士ババアの血と欲望の旅が始まって3日が過ぎた。  
相変わらずババアの戦い方は暴力的で、覚えた回復魔法でさえMP消費するからつて理由で、薬草で賄うほどだった。川を挟んだ橋を渡つて敵のレベルもあがるつてのに、ババアは貪欲に「ゴールドと経験地を稼いでいった。

「ガオオオー！」

「にひひつ、こりや強そうなモンスターだねーそうりや！」

襲い掛かる狼男の鋭い爪と牙を、はがねのつるぎで薙ぎ払つては斬り殺して毛皮を剥ぎ。

「ヒヨツヒヨーツ！」

「あん？ 戦士となつたことで素の防御力が30を超えて、防具も足した総防御力55を誇るあたしの鎧に傷をつけられると思つているのかい？ このやろうが！」

鉄の手斧を振り回す獰猛なアツクスマン達の攻撃は、欲望の虜となつたババアに効くはずもなく。

「ファイアーボール！」

「痛つつ…！ にひひつ…使い走りの魔法使いのくせにやつてくれるじゃないかあ…！ 戰利品落とさなかつたら、あんたの一族皆殺しだからね！」

ダメージ7の火の魔法を使つマジシャン相手に、マジギレして、マジシャンの落とす宝箱アイテム『魔法使いの杖』（350、ゴールド相当）を強要したりと、もうやりたい放題だった。

「にひひっ…ゴールド、ゴールド。たまらんねーこの金貨を風呂にいれで、金貨の海でひと泳ぎしたい気分だよっ…」

今まで攻守ともに弱い（魔法を使わない場合）魔法使いとして鬱憤の溜まつていたババアは、攻守ともに優れる戦士になつて、装備の充実と共に、とにかく半端ない強さで次の街まで駆け抜けた！

ヨネ レベル12

職業：戦士

H P : 131

159

M P : 42

42

装備：はがねのつるぎ

：はがねのよろい

：はがねのかぶと

所持品：やくそう×11 狼男の毛皮×105 手斧×79 魔法

使いの杖×19

所持金：5190、ゴールド

「ふう、やつと辿り着いたかい。すっかり薬草も減つてしまつたし、アイテムを売つて、また買占めるとするかね！」

だが、ババアのついた街は、なんだか閑散としていた。

武器屋防具屋は勿論、アイテムを売り買いする道具屋、アイテム預かり屋まで居ない始末。

立て札は何物かにぶち壊された跡があり、宿屋の看板もボロボロに引き裂かれている。

「なんだいこのシケた街は。モンスターにでも襲われたのかねえ……  
それじゃあ」

しかし、さすがは第一次世界大戦中、フィリピンマニラ沖で片手で重機関銃を撃ちながら、片手で高射砲を操って、足でバナナの皮をむいていたババアである。そこはそこで普通の人が良識の中で思う「町人はどうなった?」とか、「何でこうなった?」とか不安めいたことは考えず、逞しくも欲望に満ちた目と足で、金のありそうな人家を探し、情報集めと称して勝手に人の家のタンスや貴重品を物色した。

「にひひひっ……これぞ選ばれし者の特権つてやつだねえ。うひょー！こいつは一〇〇〇ゴールドじゃないか！にひひっ……役得役得！」

ババアは金から食料から子ども用の靴下まで、ありとあらゆる物品を盗みに盗んだ！

そこらの悪徳集団窃盗団でも、この金と欲望にまみれたババアの前じゃ、どいつも形無しだ。

こいつに罪悪感なんて言葉があるのか？一瞬考えたが、そんなものはこいつの辞書にはねえ。

ババアの両手に掴まれた、膨らんだ唐草模様の風呂敷包みを見れば、もう何も言えねえよ。

バタン！

「おい貴様！何をやつてるんだ！」

だがその時、金品の物色に勤しむババアの後ろから、いかにも戦士風の鎧兜を来た男が現れた！



## 苦し紛れに嘘をつくババア

5

「あんたこそ！人ん家に勝手に入つてきて誰なんだい！」

「俺は、ここ家の息子だ！」

「に、にひひつ…そ、そうですか。う、う、う、う、うん。こりゃ場が悪いやなあ、本当に」

「久々に故郷に帰つてみれば誰も居ない。おい婆さんーこの村に何がおきてるんだ！」

なんと！

両手にたんまり戦利品ならぬ盗品を抱えたババアを出迎えたのは、戦士として各地を修行して、鍛え上げられたゴリラのような肉体を見せびらかす

数年ぶりに帰つてきた、この家の元住人だった。

(まずいねえ…このままじや火事場泥棒だつてのがバレちまうよ)

とりあえずババアは、こざとこう時のために腰のつるぎをとひつとした。

だが、両手にズッシリと食い込む風呂敷包みを手放せなかつた。

(なにやつてんだいあたしの手は！そんなにゴールドを手放したくないのかい！うん？いや、良く考えればそうだねえ！手放したくなによねえ！やつぱー！)

ババアの心の中の葛藤は、3秒で終わつた。

火事場泥棒つてバレてしまえば、死刑もありうる一食触発な状態な

のに

なぜこんなに両手のゴールドが大事かつて？  
そりや、ババアの頭が理解しても、強欲な心が拒否するからや。

そして、苦し紛れにババアがとつた手段は…

「どうやらここ」の街の人は、西のダンジョンに住むモンスターに攫われてしまつたみたいですね！」

「な、なんだつてーー！」

盗人猛々しいといふか、なんといふか。

ババアは、今考えた嘘をついた。しかも変に上品ぶつた口調がまた憎たらしい。

もちろん西にダンジョンがあるなんてのも嘘だし、街の人がモンスターに攫われたつてのも嘘だ。

「あたしも今から倒しに行くので、ちょっと調査をしていたんですよオホホホホ！」

「そ、そうでしたか。俺はてっきり火事場泥棒かと…」

ババアは一瞬ヒヤッとしながらも、引きつった笑顔で笑い返した。  
職業魔法使いを経て賢さがあがつていたババアは、  
目の前のゴリラ戦士男のおつむの足りない馬鹿正直さにホッとしてた。

「じゃあ一緒に西のダンジョンに行きましょー！あなたも身なりからすれば相当の戦士なのでしょうーー！」

「ぐ、ぐつ？何いつてるんだい。あ、あたしはそこいらに面る、か弱い老婆ですことよオホホホホ！」

「いや、そんなことはない。そんな重たい鎧や兜をつけながら、そ

んなに多くの荷物をもてるんだ。只者ではない!」

「これは火事場の馬鹿力つていう

「さあ、つべこべいつてないで街の人を助けに行きましょー!さあ

!」

ゴリラ戦士男は、頭が弱いせいか人の話もまともに聞けない馬鹿野郎だった。

しかも戦士になりたてのババアより、パワーが格段に上で、丸太のような左右の腕が、グイグイとババアの体を引っ張つてゆく。とりあえずババアは、気絶させたら儲けものと、

「ゴリラ戦士男を後ろからぶん殴つてやろうかと思つたが、

ここの得意のズル賢さの高さを証明するために、男に言った。

「そ、そうだ。南のダンジョンにも、町の人が連れていかれたんですねのよオホホホホ

「な、なんですと!」

「こうしましよう!お前さんは西のダンジョンに向かつて、あたしは南!これでモンスター達に背後を突かれることはない!あああ!そうと決まれば、お前さんもあたしも行つた行つた!」

「そ、そうですか。それじゃあ仕方ありませんね」

こうしてババアは、脳みそ筋肉ゴリラ男と別れて街を出て南に向かつた。

「まったく、あんなゴリラ野郎と旅をしてたら、薬草がいくつあっても足りないよ!」

だが、街の南を進むババアは驚いた。

「い、こりや…ダンジョンじゃないか!」

嘘から出たまゝじ。

ババアの前にあったのは、おどろおどろしい雰囲気をかもし出す、  
モンスターたちの根城、  
岩に囲まれたダンジョンだった！

洞窟のモンスターに四苦八苦のババア

6

ガシャンガシャンガシャン！

ババアの着ているはがねのよろいが、走る「」とこつむせー音をだしやがる。

ババアは結局、先の見えねえ奥深い洞窟の中に入つていつた。  
ダンジョン

そんなダンジョンに入つたか。

それとも自分の持ち出した、お宝を隠すため？

二、セニセニ、違つ違つ。

ババアが、ダンジョンを駆け抜ける理由は一つ。

「にひひひっ、あたしの嗅覚をなめるんじゃなによ。この洞窟には相当のお宝があると見たよー！」

「中から匂つてゐる、金田の物の匂いが目的ね。」

だが、モンスター達だって馬鹿じやない。

自分たちが苦労して人間からせしめた金銀財宝を、魔王ならまだしもババアに献上する気なんてさらさらねえ！モンスター達は、自分

達のティトリーに入ってきたババアを我先に倒すために、奥から奥から出るわ出るわ、ゾロゾロと百鬼夜行。

\* 悪霊スケルトン が 4ひき 現れた！

剣と盾で武装した人間の死体に乗り移ったモンスターの大群や、

\* 死人こうもり が 6ひき 現れた！

嫌味な吸血攻撃と毒攻撃を繰り返すモンスターの集団や、

\* 踊るなめくじ が 12ひき 現れた！

見た目にもエグいナメクジ型モンスターがババア目掛けて襲い掛かってきた。

流石にゴールドというブーストのかかつてるババアも、これには見た目以上に手を焼いた。

「こいつ物理攻撃が効かないじゃないか！」

鋼鉄のサソリをMPを消費する大嫌いな魔法で片付けたり。

「なんて攻撃力だい！やくそがなくなつちまつよー！」

洞窟の奥地に住み着く、力が自慢のオーガに悪戦苦闘したり。

「あたしとした事がなんてことだい！ぐうづ、こんなブービートラップにい！」

見るからに高そうな宝箱に仕掛けられた、毒ガスのトラップに引っ

かかったり。

今や薬草もMPも尽きて、一人洞窟を突っ走るババアの体力は限界に近く、薄暗い洞窟の中で、『出棺を通り越してあの世へ臨終の時を迎える』いや、虫の息だった。

ヨネ レベル13

職業：戦士

HP : 14

MP : 7

装備：はがねのつるぎ

：はがねのよろい

：はがねのかぶと

所持品：やくそう × 1

所持金：12195 ゴールド

一度、HPMPが全回復するレベルアップを洞窟内でしたが、次のレベルアップまでの経験値の上限が限りなく遠く、ダメージを平気で与えてくる強力なモンスター達に囲まれて、ババアは絶体絶命だった。

「こ、この筋肉馬鹿が！あの世へいきな！」

「ウガー！」

襲い掛かるオーガ軍団を懸命に倒したババアだが、すでにがねのつるぎは刃こぼれを起こし、はがねのよろいは傷だらけだった。

「ち、ちくしょう！これが最後の薬草かい！ええーい！」

ババアは、道具袋に入った最後の薬草を、自分の肉体に与えた。

HPにして30の回復。ババアにしてみれば、焼け石に水の感覚だつただろう。

「ひい…ふう…こんな時に仲間が居てくれたらねえ…」

オーガの死体の上で汗だくになりながら、つるぎについた血を払うババア。

異世界に飛ばされてから、ずっと一人旅を続けてきたババアは、人恋しさを思い出していた。

「戦争で死んじまつた爺さん。今、あんたが居てくれたらどんなに心強いか…」

洞窟の中で、らしくないババアの吐露が聞こえると、今までモンスターをのじて来た洞窟の入り口の方から、野太い声が響いた。

「おーい…婆ちゃん!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2610e/>

---

ババアクエスト

2010年10月21日10時12分発行